



お品書き
【その巻】CODEレター VOL.15
【その式】プロジェクトNEWS
【その参】ぶどう新聞 VOL.4

以上

「イラク人質事件」に思うこと

理事 村井 雅清
(被災地NGO協働センター代表)

「イラクで4月8日邦人3人が拘束される」という衝撃的なニュースが流れた。翌日、私が代表を務める「阪神・淡路大震災 被災地NGO協働センター」として、「3人の即時釈放と自衛隊の即時撤退」を訴えた。その後状況を見守っている内に、「釈放！」の朗報が流れた。しかし、すぐさま日本のマスコミに踊った文字は「自己責任」であった。私は、事件が発生した後いろいろなことを考えた。「もし自分自身がこうして拘束されたら？」「私たちのスタッフが、もし拘束されたらどうする？」などと。同時に、CODEは同様の状況にあるアフガニスタンに関わっているだけに人ごとではなかった。

事件発生からしばらくして「誰も殺してはいけない、誰も殺させてはいけない、誰も殺されてはいけない」という強烈なメッセージがメール上で流れた。この言葉を聞いて「ハッ！」とした。10年前の阪神・淡路大震災では、「最後の一人までもが生き残って欲しい！」と願った筈だ。そして、一つのおにぎりを分けあった体験から「人間は一人では生きていけない」と実感した筈だ。基本的人権として、「生きること」について真剣に考え続けてきた筈だ。

今回の人質事件で、最初は「生きていて欲しい！！」と誰もが願ったのではないだろうか。これは10年前の「あの時」と同じ人としての思いだ。被災地KOBEに住む私たちは、10年前のあの日以来「たった一人を大切に！」ということを学んだ。今回の人質事件で、私の中では、あの震災と今回の出来事からの学びが見事に

つながった。2001年の「9・11」以来、被災地KOBEに生まれたNGOが果たす国際社会での役割は何なのかをずっと考えてきたつもりだ。結論は「最大の防災は、戦争を起こす前に止めること」だった。また、「人間は一人では弱い。でも個を大切にできるNGOの持つ多様性が勇気を与えてくれる」ということも、この10年間で学んできた。

ところで、これまで被災地から生まれた「命を育む多様な文化」を築いてきた担い手の筆頭は、「ボランティア」だと言っても過言ではないだろう。今回の人質事件に関してフランスの代表的なメディア、「ル・モンド」誌は、この阪神・淡路大震災から生まれたボランティアを「市民社会の担い手」と称賛している。被災地KOBEはこの10年間で、障害者市民、企業市民、率先市民、専門家市民等々主体的な市民をイメージする言葉と存在を生みだしてきた。こうした主体的な市民が、地球市民として自覚をしたとき、国際社会における役割が明確になるだろう。それは国際社会における「公」を築いていく「世界市民」でもあるからだ。

偉そうな言い方に聞こえるかも知れないが、今後もCODE海外災害援助市民センターというNGOの一員として、(自戒の念も込めて)地球益・人類益を獲得するべく行動をしていきたい。読者のみなさまには、遠慮なくご意見、ご批判をお願い致します。

NPO法人取得記念講演会報告

CODEでは、2月14日(土)よりJICA兵庫国際センターにて、「国際的な人道援助のあり方」と題したNPO法人格取得記念講演会を開催しました。

この講演会は3回連続で行われ、第1回は「国際的な人道活動とCODE」(講師：芹田CODE代表理事)、第2回は「災害医療とCODEの役割」(講師：NPO法人HuMA 災害人道医療支援会理事長 鶴飼卓さん)、第3回は「予防防災とCODEの役割」(講師：室崎CODE副代表)で、人道支援・災害医療・予防防災の観点から講演が行われました。

その中で「経験を原点に世界に輪を広げ、被災者と被災者のつながりを第一に考える」、「最前線の支援を支える調整役や物流・運搬などの後方支援の育成が急務」、「ハード面だけではなく、文化や生活、コミュニティの強化が防災文化をつくる」などの国際協力や支援・援助を考える上で大切なキーワードが挙げられました。

震災以降私たちは、世界各地で30回近い災害支援を行う過程で見えてきた「支え合いの文化」の構築を目指すため、CODEを設立し2年が経過しました。この間、各地では紛争による難民や自然災害による被災者が急増しています。

今回の連続講演は原点に立ち戻り、私たちにできることは何なのか、そして被災地責任として、あらためてKOBEGが果たす役割の大きさを実感する講演会となりました。

イラン地震対策行政研修生受入れ

4月15日、JICAイラン震災対策行政研修生として、イランより3名の方がCODE事務局を訪問されました。そして、阪神大震災について、震災後のNGOの活動について、また現在行っているイラン地震支援について等のお話を村井理事からいただきました。震災を経験したKOBEGから教訓を発信するために、これまで30回にわたる救援活動をしてきたことに驚かれとても興味深い内容となったようです。話題はやはり、現在支援を行っているイラン・バムについてとなり、今後スタッフがイランへ行った時にぜひお会いしましょうという話になり、地震直後にイラン政府に持参した提言書も彼らに渡しました。

また彼らにとっては、日本的な伝統家屋の匂いのする事務所や庭にある震災被災者慰霊のための観音像が珍しかったよ



第1回 芹田代表理事



第2回 鶴飼HuMA理事長



第3回 室崎副代表理事

うで、写真を何枚も撮っておられました。

4月23日には、人と防災未来センターにて、3名の研修発表会が開催され、事務局スタッフが参加しました。彼らは1ヶ月間で、東京で国の災害時における体制を、奈良では文化財保護のためのシステムを、兵庫では防災関係施設をまわられ、実り多い研修だったようです。イランへ帰国してから、ぜひこの研修を活かせるように提言を行っていくと話されていました。



研修発表風景

これまでの活動記録3/18~4/17

- 3/23 イラン地震寄付金贈呈式・毎日新聞 希望のネットワーク
- 3/25 イラン地震寄付金贈呈式・コープこうべ
- 3/28 記念講演「予防防災とCODEの役割」 講師：室崎副代表理事
コープ講演会
- 4/ 2 イラン地震報告会・日本基督教団兵庫教区長田センター
- 4/ 7 被災地の子どもたち交流プロジェクト
- 4/ 8 国連世界防災会議推進委員会・兵庫県
- 4/11 イラン地震寄付金贈呈式・天理教国際たすけあいネット
- 4/14 アフガニスタン・イラン報告会・キワニスクラブ
関西NGO大学運営委員会
- 4/15 JICAイラン震災対策行政研修生受入れ
イラン地震情報交換会・人と防災未来センター
- 4/17 CODE理事会

ありがとうございます。3/18~4/17

会員・寄付者ご芳名(以下順不同・敬称略)

一般寄付

三井さよ(東京都) 大津敏美(滋賀県) 石崎彩子(大阪府) 岩国正次、池島佳子、雪岡恵津子、鷹巣恭宏、倉賀野学、柳原たか子(以上兵庫県)

新規会員

- ・正会員
個人：鶴飼卓(兵庫県)
- ・賛助会員
団体：神戸YMCA

編集・発行 CODE海外災害援助市民センター
〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通2丁目1番10号
TEL: 078-578-7744 FAX: 078-576-3693
e-mail info@code-jp.org URL <http://www.code-jp.org/>
郵便振替：00930-0-330579

事務局では、不要になったハガキや書き損じハガキを集めています。これらは、郵便局で手数料を払えば、官製ハガキに交換していただけます。業務の中で使用する郵便代金の削減の一環に使用させていただきます。皆様のご協力をお願い申し上げます。

CODE プロジェクトニュース

CODE海外災害援助市民センター
 〒 652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10
 Tel: 078-578-7744 Fax: 078-576-3693
 e-mail: info@code-jp.org
 URL: http://www.code-jp.org/

困ったときは おたがいさま！！

火災に見舞われたタイ・バンコク・スアンブルー地区のみなさんに支援を！！

4月23日(金)午後1時頃、タイ・バンコク・サトーン区スアンブルー地区で火災が発生し、約8000人の住民が避難されたようです。スアンブルー地区は、1985年からSVA(シャンティ国際ボランティア会)が支援活動を開始したところです。SVAは、阪神淡路大震災の直後から被災地KOBEに現地事務所を設置し、2年間にわたって支援して下さったNGOです。そして今回火災に遭ったスアンブルー地区は、貧しいスラムだと聞いておりますが、10年前の阪神・淡路大震災の時はSVAバンコク事務所のお気遣いによりこのスラムで募金活動をされ、被災地KOBEに寄附をして下さいました。情報によりますと、SVAバンコク事務所が支援していたコミュニティ図書館と保育園が全焼したとのことです。幸い園児は全員無事に避難したと聞いております。



被災地KOBEの私たちは、10年前の「あの時」の支援は今も忘れていません。忘れていどころか、むしろあの「支え」によって、私たちもその後の海外の災害に対して「救援活動」として取り組んできました。「支えあいは国境を越えて」というメッセージは、あれからよく使われますが、その最初の「支え」は、このスアンブルー地区のみなさまでした。この時から、私たちは多くのことを学ばせて頂きました。

今回の火災でスアンブルー地区はほぼ全焼した模様です。火が燃え広がる数時間を想像すると、被災地KOBEの誰もがあの10年目を思い起こすことでしょう。障害者が、子どもが、高齢者が、そして乳飲み子を抱いた女性が、火災の中を逃げ惑う姿は容易に想像できます。

10年目の「あの時」貧しい生活の中から阪神・淡路の被災地のために寄附を集めて下さったこの「スアンブルー地区」のみなさんにお返しをしたいと思えます。是非、各々のところで募金活動して下さいませんか？よろしくご協力のほどお願い致します。

イラン地震救援プロジェクト(2003年12月26日～)

イラン大地震から半年の6月末、被災地・バムの子どもが描いた絵画約100点を展示する「小さな絵描きたち～被災地バムの子どもたちが見た風景」が、神戸市中央区の「人と防災未来センター」で6月29日～8月29日まで開かれます。イラン大地震後、「被災地交流実行委員会」(事務局：NPO法人「日本災害救援ボランティアネットワーク」(NVD))がCODE、兵庫県、神戸市など官民7団体の協力の下、結成されました。

現地へ届けられた日本の子どもたちの絵は、本当に喜んでいただきました。私たちが持参した絵を子どもたちは目を輝かせながら、のぞき込んでいました。園長先生は、「地震後で一番うれしい出来事だわ。」と泣きながら言ってくださいました。子どもたちの「がんばれ」のメッセージには、言葉を必要としない暖かいメッセージがたくさん込められていたことを実感しました。

ぜひ皆様お誘い合わせの上、会場まで足を運んでいただければと思います。

NVNAD内の同実行委事務局（078・231・9011）。

CODEは、5月11日よりスタッフ斉藤容子をイラン視察のため派遣致します。現地での再建の様子、支援の進捗状況、今後の支援についての調査等を行う予定です。また現地からの直接レポートが届き次第、随時、皆様にはお知らせを致します。報告書等を帰国後作成し、皆様には報告させていただきますが、現地からの情報が届き次第CODEメーリングリストにて、発信を随時しております。メールアドレスをお持ちの方で、登録をご希望の方は事務局までお知らせください。（事務局：info@code-jp.org）

私たちが前回、支援を決めた Hope of Mother（幼稚園）へのコンテナハウス、あずまや建設は現地の大工さんへの発注が行われたとの報告がありました。メヘラザンという私たちの協働相手である若手建築家 NGO が、あずまや等のデザインをし、こちらにそのデザイン画も送って来てくれました。以下がその一部です。

募金について

募金にご協力して頂ける方は、下記の郵便振替口座にて通信欄に「イラン地震支援」「アフガニスタン支援」[バンコク・スラム火災支援]とそれぞれ明記してください。なお募金全体の15%を上限として事務局運営・管理費に充当させていただきます。

口座番号:00930-0-330579

加入者名: CODE

CODEの活動は、様々な方のご支援に支えられて行われています。すべての皆様にご報告を直接させていただきたいのですが、時間的な制限もあり、ホームページやメーリングリストなどを通して広くご報告させていただいております。ご理解のほどよろしくお願い致します。

当センターのホームページ<<http://www.code-jp.org>>にも同様のものをアップしております。

（以上編集：事務局 斉藤容子）